

NO. 156

発行日 : 2025年5月1日

原災事故被害者 相双の会

連絡先

國分富夫（会長）

住所

〒976-0052

福島県相馬市黒木字迎畑 91-12

電話 090 (2364) 3613

メール kokubunpisu@gmail.com

事務局

鈴木宏孝 090-2909-6133（浪江）

関根憲一 090-4889-3726（富岡）

板倉好幸 090-9534-5657（南相馬）

戦争させない1000人委員会東南部

第9回春の福島を知るバス視察団

4月12～13日の日程で東京から1000人委員会の方々が中心に視察団を結成し、来福していただきました。今回の視察は汚染土の中間貯蔵施設見学となり、参加者からはこれまでにない質問が多くあり有意義な視察でありました。

今回は特別に東京新聞の山川剛史記者にご同行頂き2日目には汚染土のあり方について講演をいただきました。

視察団のみな様から感想文をご投稿いただいておりますが、紙面の関係もありますので次号へ引き続き掲載させていただきます。



「福島ツアー」感想

北野幸雄

今回は前回（第8回、2023年11月）を越す参加者となり、清掃労組（若手）の多数参加で大いに盛り上がった。汚染土問題と向き合い、良い意味で頭が疲れたツアーでした。

福島の景色はこれまでの秋のツアーと全く異なり、夜の森の駅と公園は桜、桜の真っ盛りで

春爛漫でした。駅前4キロの桜並木との説明でここが桜スポットだと再認識、前回見た人気の全くない駅待合室と公園が今回は結構な数の花見客、意外な感じでした。

駅周辺を中川さんが線量計で放射線を計測していたので見せてもらったら道路上で0.77 μ Sv、人家の近くだと2.46 μ Sv、高い、「帰還困難区域」の解除がごく最近された場所なので

それくらいある」と山川記者、桜から現実に引き戻された思いでした。

バスから見る景色に違和感があまりなくなっていたのは、壊れた多くの家屋や木々が撤去され木々も伐採され更地となったせいだと気づいた。特に以前はいたるところに積み上げられていた黒色の除染土袋（フレコンバック）が「汚染土が中間貯蔵施設」に移動したことが景色を大きく変えた。

ツアーの目玉は「汚染土中間貯蔵施設」の視察、私は先月環境省が行った「汚染土の再利用の大臣通達」へのパブリックコメント募集に意見を出したこともあって、汚染土「再利用」基準 8000 Bq/kg の根拠など疑問・質問を案内人（中間貯蔵事業情報センター・JESCO の大沢氏）に行い、「汚染土の再利用」の問題点について理解を深めることができた視察となった。（ツアーに感謝）

同施設への年間来訪者は去年約 1000 人、「最



近は学生（中学生など）さんが多い」（大沢氏）と聞いて驚いた。わざわざ放射線の高い場所に子供を連れてくる親、先生（？）の放射線被ばくのリスクへの警戒心は事故後 14 年でかくも風化するものかと。

原発事故の責任は東電と政府にあるのは紛れもない事で被害者（福島県民だけでなく私たちも）が力を合わせて責任追及することが次の事故を防ぐことにつながると思う。次のツアーで

はより「復旧」した福島を見たい。

初日夕方の夕食交流の際、掃労組の若い方々に直に原発について意見を聞く機会を持てたことに感謝。2日目の浮船会館での廃炉現状報告（山川記者）後の質疑は質問続出で時間が不足し私は質問できず若干消化不良でした。意気軒高な国分さんのアピールに感動しました。国分さん、山川記者、そして皆さまありがとうございました。

中川 鮎子

立ち寄った大熊町は昨年未まで帰還困難区域で、何もかも取り壊され、更地が目立った駅前にはまっさらの建物が三々五々建てられていた。見事な桜を撮りながら測定器で測ると 2-4 μ Sv とまだらに高い。双葉郡富岡町夜ノ森一満開の桜並木に沿ってそぞろ歩きの花見客を横目にバスで通過する。この先の大熊町「中間貯蔵事業情報センター」は最先端技術を誇るクリーンな施設。生き物の息遣いのない無機質な雰囲気

冷え冷えとする。参加 5 回目となる今回は、この中間貯蔵施設見学及び國分富夫（原発被害者相双の会会長）さんと東京新聞山川剛史記者のレクチャーがあり、より厳しくなる現状を見据えた、内容の濃い体験となった。

フレコンバック満載ダンプが 206 万回も往復搬送したこの施設の広大なエリア（渋谷区と同面積）には台形ピラミッド様埋立地 5 か所があり、“除去土壌等”が”安全かつ集中的に”貯蔵され

ているという。嚴重な身元確認の後、バスで施設内を巡る。第一原発1～6号機まで見渡せる地点で、全員ヘルメット、マスク、手袋姿で下車し説明を受ける。途中、避難後閉鎖された老人ホームと14年前から打ち捨てられたままの車両の傍を通り、胸が締め付けられる。8000 Bq以上の高レベル放射性廃棄物埋立地で再度下車。除染のため放射線量は1.3-2.1 μ Svとさほどではないが、周囲の草地で測るとすぐ4-5 μ Svに跳ね上がる。

この除去土壌を2045年3月までに県外で”最終処分”するために、「除去土壌の再生利用に向けた道路盛土実証事業」いう、おぞましい実証試験が検討されており、新宿御苑や所沢に持込んでの計画や、また、幹線道路に再生資材として利用する実験がすでに行われている。総額何兆円にもなるという諸費用をかけて、すでに集めた“除染土”を全国拡散する等、膨大な無理無駄無責任ではないか。

放射能が野山に広く拡散して、一握りの“除染”のために膨大な税金とエネルギーを浪費し続けている絶望的な現状にため息、かすかな希望を見出せたのは、現地で声を上げ続けておられる福島県人の國分さんや命がけの記者魂で取材を続けておられる山川記者等、そして、何より問題意識を持って参加された若者たちが健在であること!事務局の皆様、参加の皆様有難うございました。

小林吉雄

参加者に20代・30代の青年が多く参加されたことに対し事務局に感謝いたします。

これからの日本を背負っていく方々に、福島原発の現状を知って頂いたことがよかったですと思います。

私が一番心に残っていることは、大熊町デイケアセンター・運送会社で残っていた、車

そして、中間貯蔵施設を見学したことは、とても有意義でした。

汚染土が30年間で放射線が半減するので、全国各地で再利用する案は、万人受けしますが総論賛成、各論反対です。

福島第一原発がメルトダウンして、核燃料が防護壁・土と溶け合っしまい、やっどデブリ0.7mgを取り出したところですが、ただし、このデブリと他の880トンもの核燃料を取り出しても、最終処分場がありません。どうするのでしょうか？

汚染土も最終処分場がありません。現状では、5m・5m・5mで覆土して自然界に放出して、半減期を待つところです。このような処分方法は日本でしか行なっていないので、実験的にこのまま研究材料としていただけるのはいかがでしょうか？

覆土表面には芝が植えてありますが、時とともに種子が飛んできたり、鳥が木の実を運んで来てちょっとした林になるのでしょうか？

「公園・多目的運動場・憩いの場」を造るスペースとしては、中間貯蔵場としての名称はいいのですが、残念ながら使用する人がいません。

国策で、非難生活を余儀なくされた方々、帰還できない住民の方がたくさんいます。

このような福島の現状を知る機会となりました。

今回の学習会ありがとうございました。

岡安英治

今回のツアーで見学した中間貯蔵施設は2045年までの期限付きの施設だ。それまでに貯蔵している除染土は国内の最終処分場に搬入するのだが、場所は未定。

そこで政府はその除染土を国内各地で再利用すると言いだした。再利用地はすなわち最終処分地ということだ。国内各地で最終処分するということ？

國分さんは除染土を県内にとどめておくべきだ考えている。余所者の私にはとても言いにくいですがそれ以外に策はないと思う。

今回訪れた貯蔵施設を運営管理している中間貯蔵環境安全事業株式会社（JESCO）は100%政府出資の特殊会社、ということだが環境省の天下り先だろうと思った。

この貯蔵施設には新日鐵住金、クボタ、大林組、東京パワーテクノロジー、JFEエンジニアリング、前田建設、三菱重工、鹿島建設、電通、共同PR、三菱総研、凸版、パソナという「蒼々たる」企業が群がっている。災害便乗主義（ショック・ドクトリン）を目の当たりにした。

後藤 薫

今回のツアーでは、中間貯蔵施設を見た。膨大な量の土が、事故のあった原発の近くに積み上げられていた。3層で全体が15メートルの深さになり、いくつかの地区に分散された合計の広さは渋谷区がすっぽり入るくらいだという。汚染土はできるかぎり除染され、シートに覆われ、さらに汚染されていない土で覆われていて、処理された土のある場所でも線量はかなり低くなっていて、私達見学者はその上に案内され、貸してくれた線量計で線量を測ることができた。線量は歩き回っていると変わるが、たしか0.25マイクロシーベルト前後だった。盛土の中央あたりが一番線量が低く、0.1マイクロシーベルトぐらいになるところもあるという説明だったが、中央のほうに行ってみても線量は変わらなかった。

私が初めてこのツアーに参加したのは、事故

ノブイリのように覆ったほうがいいと思い、バスで最後に参加者全員が感想を述べるときにもそう言ってきた。原発がもっと早く覆われていれば、14年間に拡散した汚染物質の量はずっと少なくてすんでいただろう。そうすれば、広範囲にわたり、ときには何度も行われた除染で出た汚染土の量はずっと減っていただろう。とにかく、実際に中間貯蔵施設で見た汚染土の量はとてつもないものだった。

そして、覆いをせずに取り出そうとしたデブリは、14年たってほんの0.7グラム弱だった。これではデブリを全量取り出すことによって、原発とその周辺の地域を元の状態にもどすのはほぼ不可能だと考える人が増えているのではないか。デブリを全量取り出せたとしても、それをどこに保管するのだろうか。

処理した土であっても、完全に放射性物質が無くなったわけではない。それを福島県外にばらまくということは、福島県外の最終処分場となる地域に放射能汚染物質を移動させるだけであり、移動途中だって多少なりとも線量が高くなるだろう。

やはり汚染土は事故の起こった福島原発周辺地域に保管すべきだと思う。つまり、中間貯蔵ではなく、最終貯蔵とするのだ。汚染した地域をこれ以上増やさないことは日本全体にとって最善の方法だと思う。中間処理に関する法律というものができていて、そこでは30年後の

福島第一原発



のあった3年後ぐらいで、今回までに5、6回参加している。毎回、事故のあった原発をチェル

2045年には福島県外の最終処分場に汚染土を移動しなくてはならないという。だとすると、

あの膨大な量の、しかもすでにある程度処理されたとはいえ、汚染が完全には無くなっていない土を移動しなくてはならない。その手間、費用はまた膨大なものであり、そこには税金が使われるのだろう。今回のツアーのとき、被害者の一人として、訴訟をはじめいろいろ積極的に事故の責任を追求する活動を精力的にやってきた國分さんが汚染土は県外に出すべきではないとはっきり言われた。ツアーの参加者にもそういう意見を言う方が今までになく多かった。

14年間に事故後の処理がどの程度進んだかを見ると、被災者の方々が元の土地で事故前のような生活を再開することがそう容易ではないということが見えてきたという印象だ。

被災者の痛みを少しでも癒すためにすべきことは、県外のどこかで汚染土を受け入れて、そのどこかが汚染を福島の人々と分かち合うことではない。膨大な汚染土を掘り返してまた移動する費用を、被災者への補償に使う、あるいは裁判の判決で被害者側に寄り添った判決を出すとか、いろいろと方法はあるはずなのだ。

たとえ中間処理した汚染土を取り除いたとしても、除染されていない山林が広範囲に残っているからには、もとのような汚染のない土地に戻るには、100年以上はかかるだろう。被災者の方々の苦痛は計り知れないし、なくなることはないにせよ、その苦痛が少しでも減るようにすることは重要だが、汚染土や汚染水は被災地域（どこで線を引くかがまた問題になるにせよ）に保管するべきだと思う。

私はこんな危険な原発を再稼働することには断固反対する。たとえ原発がないために電力の供給が増えなくても日本の経済を良くする方法はあると思う。経済が良くならず、生活が貧しくなるとしても、それは仕方がないことではないかとも思っている。

菅野幸枝

第9回目となる福島バスツアー。私は2回目。

それも久々の参加でした。

今回は汚染土の中間貯蔵施設も見学するとのことで、リュックには簡易レインコートや綿手袋、帽子、マスク等用意し臨みました。事前のツアー「案内」で、中間貯蔵施設では「半袖、サンダル不可」「トイレ不可」となっていたので、どんな放射線量か、現場かと半ばドキドキしながら参加しました。

実際は、東京から乗ってきたバスで周り、施設の人からヘルメットやマスク、綿手袋も借りられ、バスの外に出る時、それらを装着するというものでした。中間貯蔵の上で線量を測る体験では $0.2\mu\text{sv}$ とあまり高くはありませんでした。でも足元の盛り土の下は 8000 ベクレル未満とはいえ高い線量、そして近くの森も高線量。中間貯蔵施設を望める高台では福島第一原発もよく見えて、その隣の中間貯蔵施設の広大さに驚くしかありませんでした。

施設が渋谷区よりやや大きいというのも納得です。しかし中間貯蔵施設を 20 年後に現状復帰し返すため汚染土を全国に運び再利用すること。放射線が許容線量になる半減期の 190 年も適正に管理するというのは、とても難しいと感じますし、せっかく集めた汚染土を全国に広げるといっても疑問を感じます。

今回のツアーで福島現地に来て、福島の今を知り、東京新聞の山川記者や相双の会國分さんから、詳しいお話を聞けてとても良かったです。見聞きしたことを自分の言葉として、こなして、周りの人に伝えたいです。全ての原発を廃炉に。原発事故の責任を国や東京電力にとらせたい。二度と原発動かそう新設しようと考えないように

類家敦也

今回バスツアーに参加して率直に思ったことは、復興はまだまだ進んでいない事です。

私がこのバスツアーで一番印象に残ったのは中間貯蔵施設を実際にバスで周り被災地の現状

を知るイベントです。最初に立ち寄ったのがサービスセンターの「サンライトおおくま」です。ここはバスから降りて施設の中を見学するのではなくバスの中から傍観していました。そこには汚れた外壁や壊れた車庫のシャッター、地震で倒れたままのホワイトボードなどが確認出来ました。特に印象的だったのがカレンダーが2011年のままで壁に掛かっていた事です。これは放射線の影響でこの地域一帯に人が介入できないことを表しています。この復興したくてもできない現状を目の当たりにして私は何もできない自分の対してやるせなさを感じました。

次に実際に降車して印象に残った場所は、大熊②工区土壌施設です。ここでは測定器で放射線度を測る体験をさせてもらえました。手に乗せて測ると地面に置いて測るとでは小さな差ですが数値が違って驚いたのと同時に、放射能は目に見えないものなので、知らず知らずに浴びてしまうと考えると、恐ろしいと感じました。

中間貯蔵事業センターの資料館を回って驚いたことがその地域一帯に住む野生動物は放射線に関係なく分布していることです。野生動物が生息しているという事は人も問題なく過ごせることになります。だからと言って、汚染度が微量だから住みたいという人はいないと思いました。

このバスツアーを通して被災地や、復興に対する気持ちが少し変わりました。参加するまでは被災地を地元とする人たちが可哀そうだから早く行動しない国に憤りを感じていましたが、実際に放射能度が高くて人が立ち入れない現場や、汚染土をどこで処理するのかという様々な問題を抱えているのを知り、政府が何もやらないわけではないと思いました。被害があったから原発をなくそうではなく、次の被害を出さないような対策をすることが大事だと思い、原発が危ないからなくせとヤジを飛ばすのではな

くみんなでどうしていくか考えるのが大切だと思いました。

浦野貴恵

中間貯蔵施設とは福島第一原発により、環境中に放出された放射性物質を取り除く除染により発生した土壌等を一定期間保管する施設です。また、施設といっても、大きな建物ではなく、広大な土地でした。

今回は中間貯蔵情報センターだけでなく、実際に埋めている土の上に立ち、線量計で計測してみるとという体験をしました。数値は、普通の地域より少し高いかなというくらいで、やっぱり自分の目で見て体験することは大事だと改めて感じました。

作業に従事されている方々には自衛隊を退役された方や、地元の建設関係者などが多かったと伺いました。一日も早い除染と除去土壌の削減（安全な再生利用）に向けて様々な方が丸となって取り組まれているのを深く感じる事ができる施設でした。しかし、先祖代々受け継がれてきた土地を手放した方たちのお話も伺い、複雑な気持ちになりました。

また、2045年3月には福島県外で最終処分することが法律で定められているということを知り、福島県外に移送することが本当に最終とあって良いのか、原発事故の終わりとはなんなのか、疑問に感じたのと同時に、もう少し勉強しなければならぬと思いました。

今回、福島を訪れて感じたことは、実際に足を運び、震災や原発問題の正しい知識と情報を得ることです。また、同じバスツアー参加者でもそれぞれの価値観や考え方の違いがあり、様々な意見を受け入れた上で、同じ復興というゴールを目指し、一步一步進んでいくことが大切だと思いました。

感想文、次号（6月1日）157号に続きます。
よろしくお願いたします。